

むと疑ふ。すなはち誓願を發し、像を造りて恭敬はむとす。遂に大唐に至りて、
 摩訶羅に過ぎ、唐皇に重せらる。日本國の使に従ひて、養老二年に本朝に帰向る。
 興福寺に住み、其の像を供養して卒ぬるに至るまで息まず。誠に知る、觀音の
 威力の思議すること難きことを。讚に曰はく「老師遠く學びて、難に遭ひて帰
 らむとす。濟渡るに由無く、聖を憶ひて椅に坐る。心に威力に感りて、化袋采
 り穿く。別れて後に漚に繋れ、儀を圖して常に礼みて、其の役饗ます」とい
 ふ。

禪師弘濟は、百濟國の人なり。百濟の乱の時に當りて、備後國三谷郡の
 大領の先祖、百濟を救はむが爲に軍旅に遣さるる時に、誓願を發して言さく
 「もし平に還来らば、諸の神祇の爲に伽藍を造立て多諸くの寺を起らむ」とま
 ず。遂に災難を免れ、すなはち禪師を請へて相共に還来り三谷寺を造る。其

の禪師の伽藍と諸の寺とを造立てたる所以なり。遺俗觀て、共に爲に欽敬ふ。
 禪師尊き像を造らむが爲に、京に上り財を売る。既に金と丹との等き物を買得
 て、難破の津に還到る。時に海の辺の人大なる龜四口を売る。禪師人に御へて

買ひて放たしむ。すなはち人の舟を借り、童子二人を將て共に乗りて海を渡る。
 日晩れ夜深けて舟人欲を起し、備前の骨嶋の辺に行到りて、童子等を取り
 て海の中に擲入る。然うして後に禪師に告げて云はく「速に海に入るべし」
 といふ。師教化ふといへども取なは許さず。茲に願を發して海の中に入る。水
 腰に及ぶ時に石を以ちて脚に當つ。其の脚に見れば、龜負へり。其の備中
 の浦にして、海の辺に其の龜三領きて去る。是れ放てる龜の恩を報ゆるかと

疑ふ。時に賊等六人、其の寺に金と丹とを売る。檀越まつ龜を何を過ゆ。禪
 師後に出でて見れば、賊等亡然しくして退還を知らず。禪師憐愍ひて刑罰を加
 へず。仏を造り塔を造り、供養し已りぬ。後に海の辺に住みて往き來る人を化
 ふ。春秋八十有餘のとしに卒ぬ。畜生すらな性思を忘れず、返りて恩を報ゆ。

何にいはむや、人にして恩を忘れむや。

第七

第六編 善業についての現報説話。今昔物語
 集十六ノ一、扶桑略記・養老二年(宅心)条に
 書來。
 三底本訓釈「遷伯也、依也」。三高僧なる
 がゆえの條であるが、年齡に關しては異説が
 多い。三統日本紀・養老五年六月二十三日
 詔に初門行、魚叉遊學、理經十七代、備書
 繼行、解三五術、方備一本經、枳實良深、如
 有修行天下諸書、森樹世業、一何傳備之
 例ととみえる。三高僧の氏族である。
 次部は聖部(三氏)とする。三推古天皇は五九
 二年に即位、六二八年に聖武、下文に養老二年
 に聖武元年とみえ、推古天皇の末年より教
 養遊學、理經十七代とあるのより推せば、育
 明天皇の代(聖武六)で高僧に遇つたことにな
 る。推古天皇の代とすれば九十年以上の遊學と
 かりあまりに高僧にすぎざるが、本説話の内部に
 矛盾を生ずるわけはない。三高僧傳。
 六六八年。三原又急其河辺、倚壁無動。
 其は遊説にたかつかつて三と訓んだが、この
 三は既に別の意で用いられているような印象を
 与えている。別の訓みが考えられてもよい。
 三高僧のイメーは中宮八條の不知老人
 に結びついている。觀音を念じたところ船が現
 われて救われた、という説話には、三高僧音心
 驗記の三法師の説話がある。三老翁と舟がた
 ちまらに消えたとはいふイメーは下巻八條の
 「既而其餘、奄然不現に結びついている。
 一耐え忍ぶこと、六波羅蜜のひとつ。三七一
 八年。三扶桑略記・養老二年条には安國其條
 在之とある。三底本訓釈(助也)。三底本
 訓釈(遷忍也)。三底本訓釈(賢可久社)。
 第七編 善業についての現報説話。今昔物語
 集十九ノ三十三に書來。
 三買ひ取る。三底本訓釈(阿可比天)。二末
 群。本説話以外に所伝をみえ。二六六〇年、
 百濟滅亡。三底本訓釈(三底本訓釈)三
 二部の是旨。三事、三善所部、三三説書、三
 員令)。二六六二年、出兵。六六三年、白村

